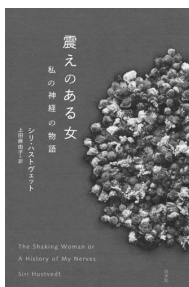


シリ・ハストヴェット著

## 『震えのある女 私の神経の物語』

石谷 治寛



本書は、シリ・ハストヴェット（一九五五年―）による、自身の奇妙な病気に関わるエッセイである。その症状とは何かを、彼女自身の診療体験、精神分析学や神経生理学の著作の読書遍歴、さらに「書くこと」をめぐる文学的営みを通して、明らかにしようとするのがその主題である。神経学者のオリヴァー・サックスの一連の著作（二〇一二年末には『幻覚』を主題にした著作が発表された）のように、さまざまな精神的な病いの症例を扱う読み物は、精神科学の一般的な啓蒙の役割を果たしており、本書もこうしたエッセイの系譜にあるといえる。本書では小説家という精神医学の非専門家の視点から、自分の体験の告白を通して、専門的な学説に深く踏みこんでいく構成が特徴的である。

ハストヴェットは、自分の父の死の二年半後（二〇〇六年）、父が四〇年近く教授をしていた大学のキャンパスで、聴衆の前で講演を行っている最中に、激しい震えを起こした。その時は、体に痙攣が現れながらも、なんとか原稿を読み上げることができたのだが、それ以来、この震えの謎、心身の症状に関する疑問にとり憑かれていくことになる。「顎から上はよく知っている私だっただけで、首から下では他人が震えていた。私に何が起こっていたにせよ、そして、これから私の苦しみにどんな名前がつけられようと、私の奇妙な発作に、どこかで父につながる感情的要因があったのは間違いない。問題は、私自身が感情的になっていると感じていなかったことだった。私は落ち着き払っていたし、理性的でもあった。何かがすっかりおかしくなってしまった。では、その正体は？ 私は、震えている女を捜すことにした」（二〇頁）。このように本書は、父の死にまつわる特殊な出来事のときに現れた症状を通して、『震えのある女 Shaking Woman』を内に抱える「私」とは「誰か」を探求する、半ば精神的分析の半ば哲学的なエッセイになっている。いわば、「私は痙攣する、ゆえに我あり」というわけである。では、精神と身体の不可思議な関係にまつわるその震えはどのように現代の精神医学では診断されるのか。ハストヴェットの記述を辿っていききたい。

彼女は最初、脳神経外科に行つて、薬を処方された。処方さ

れたロラゼパムの服用によって症状は一定軽減したにせよ、ロンビア大学のナラティブ・メディスンプログラムで講演したさいにも、その震えは現れてきた。体が激しい痙攣で震えていても、感情的には落ち着いていることから「てんかん」の発作とは考えられない。器質性ではなく心因性だと思われるこの症状を一体どのように名付けたらいいのだろうか。彼女は自分の特殊な震えの謎に取り組むために、精神医学の著作に向かってみる。一九八〇年以降の『DSM』の基準に従うならば、精神的な苦痛が身体に現れる痙攣はおそらく転換性障害だと診断されるだろうが、その症状の原因は現代の科学でも十全には説明しきれない。さまざまな可能性を考慮にいったとしても次々と疑問が生じてくる。この転換性障害は、かつてヒステリーと呼ばれていた何かだろうか。あるいは、父の死という何らかのトラウマや解離の症状に関連しているのだろうか。「この新しい言葉の根底には、古い言葉がまるで幽霊のように取り憑いている」。エッセイ全体は、幽霊のようにとらえどころのない、この一九世紀の古い言葉の名残り——フロイトやジャネにまで遡る——を突き止めようとするにある。それは、かつて病気の時に服用した薬の名残であるかもしれないし、また実の父の言葉の思い出であるのと同時に思春期から慣れ親しんできた精神分析学の用語の残響でもあるかもしれない。

## 私の来歴——文化的経験と病歴

本書の魅力は、このように具体的な自分の文化的経験と病歴とが密接に絡み合うところに「私」を見出そうとしていくところにある。一六歳の頃にフロイトに魅了されたというハストヴェットが、片頭痛のために最初に神経内科にかかったのは、最初の発作からさかのぼること二〇年以上も昔のこと、一九八二年（二七歳）の夏だったという。彼女は新婚当初のバリ旅行で画廊に訪れたとき、左腕が引つ張り上げられ、後ろの壁に叩きつけられるように感じ、その後一年あまりひどい片頭痛に悩まされた。さまざまな安定薬や睡眠薬を試した後、神経内科の診察の結果、抗精神病薬を投与され、拘束具で縛られた患者とともに八日間ほど入院するものの、結局どこが悪いのかわからずじまいだった。それでも彼女が再び自ら精神分析学にのめり込んでいったのは、自分の頭痛の種について解明したいがからであった。ハストヴェットが書くように、アメリカの精神医学のあり方は、二一世紀の現在、大きく変貌してきている。いまや精神科医の大部分は、対話をソーシャル・ワーカーに任せて処方箋を書くだけになり、「精神分析はだんだん文化の周縁に追いやられる」ようになってしまい、「薬理学に支配され」ている。また彼女自身にしても、一度は精神療法を受けたことがあるが、

セラピストに胸の内を素直にさらけ出すことを「恐ろしいことのように感じる」ことさえ認めている。にもかかわらず、彼女は精神分析学の著作を読んだり彼らの話を聞いたりすることに、はいまだ魅了され続けている。

こうした彼女の精神科学に対する関心は、このエッセイの前小説『The Sorrows of an American』（二〇〇八年）の執筆の準備によってすでに深められていた。この小説は、精神内科医であり精神分析家である主人公エリック・デヴィッドセンの視点から、彼の父の死について語られる作品である。この大作のなかで彼女は、現在の精神分析家の生活を克明に描写するのにあわせて、実の父が残した日記やノートの類もエリックの父の言葉としてふんだんに引用した。小説全体は架空の主人公である現代を生きる精神分析家の目を通して、完全な創作物であるといえるが、ハストヴェットにとっては実の父の残した実際の手記を通して、彼女自身の家族をめぐる物語——ノルウェーからアメリカのミネソタ州に移民した数世代にわたる物語、その中心には太平洋戦争で日本兵を殺した父のトラウマがとり憑いている——が語られもする。その意味で彼女の小説は、実の家族の履歴をたどる準自伝的な物語になっている。彼女は、自分でこしらえた主人公エリック（その名から「アイデンティティーの危機」の概念を提唱した精神分析家で発達心理学者エリック・エリクソンを容易に思いおこさせる）を「想像上の弟」

と思うようになったといい、「彼になりきるため」に、薬理学を勉強し、精神病患者の回想録を数えきれないほど読み、いつしか精神分析協会の脳科学の講義に毎月出席するようになっていった。

それ以来ハストヴェットは、ニューヨークで神経精神分析学（neuropsychanalysis）という新しい分野のグループに参加するほどまでに、この学問分野にのめり込んでいく。神経内科の専門家、精神内科医、精神分析家たちが、最新の脳研究の見解との共通点を探るのがこのグループの取り組みである。彼女はいまやこの会の広告塔のような役割さえも果たしており、二〇一一年にベルリンで行われた第一二回神経精神分析学の国際会議では、神経科学者の第一人者アントニオ・ダマシオと対談しているほどである。フロイト説を現代の神経科学の知見で修正しつつも、生物学的な神経の働きと神経の変化が特定できない無意識の作用の両方に当初の精神分析が深い関心を持っていたこと（『科学的心理学草稿』一八九五年）への原点回帰の傾向が模索されるようになってきた。彼女はこの立場から多くのエッセイを精神科学の雑誌向けにも書いており、二〇一二年六月にはエッセイ集『Living, Thinking, Looking』を発表することになる。このエッセイ集には、本書の内容とも重なる彼女が常日頃感じていることを綴ったものから、心脳問題に関する最新の神経精神分析学の話題、そして数々の文学論や視覚芸術につい

ての講演や短評（モランデイ、リヒター、ブルジョワ、ゴヤなど）が収められている。すでに彼女は、アートに関するエッセイも幾つか発表しており（『フェルメールの受胎告知』二〇〇五年——この著作で私は彼女の非学術的だが経験論的で非凡な洞察力に魅了され、モランデイに関する拙論で参照した。岡田温司編訳『ジョルジョ・モランデイの手紙』みず書房、二〇一一年）、芸術論で培われた注意深い観察力が、本書では芸術家としての自己の問題に内に向けられているといえよう。このようにハストヴェットが扱うエッセイの主題は極めて広範囲にわたっているが、それらはアカデミックな知識にも裏付けられていることは彼女の学位が証明する通りである。彼女は、学生時代からメルロ・ポンティらの現象学に親しみ、コロンビア大学では一九世紀の小説家チャールズ・デュケンズに関する論文で文学博士号を取得した。しかし、アカデミックな研究や批評の方向性には進まず、高名な小説家である夫のポール・オースターの助力を得ながら創作の道へと進んでいったのである。

## 書くこと——記憶と場所

現在彼女が週一で文学を教えているのは、大学ではなく養護施設の子どもたちに対してである。その経験は本書にも触れられており、このエピソードでは彼女自身の「書くこと」をめぐる

立場が明確に表明されている。彼女は、作文のクラスで視覚芸術家のジョー・ブリナードにならって、「ぼくは覚えている」という言葉から作文を書きはじめさせる（ブリナードの訳書は二〇一二年に白水社から出版された）。そのとき記憶の連鎖が活発に引き起こされたことを驚きとともに述べている。「ぼくは覚えていると書く行為そのものが、記憶を生じさせるのだ。それは、たいてい過去のきわめて具体的なイメージや出来事、長いあいだ、思い出しもしなかったものであることが多い。ぼくは覚えていると書くことは、運動と認知、両方の動作を引き起こす。たいていの場合、文章を書きはじめたときにはそれがどうやって終わるのかわからないけれど、ひとたび覚えているという単語がページに記されると、何らかの考えが浮かんでくる。一つの記憶が他の記憶につながることもよくある。ここには連想の連鎖があるのだ」（六四頁）。このようにハストヴェットは、「書くこと」とともに記憶が不随意に生じること、運動と認知、身体図式と連想記憶とが深く連関していることへの深い驚きを表明している。この箇所では彼女は、心理的な自動症<sup>II</sup>オートマティスムへの関心が高まる二〇世紀初頭には、自動筆記が治療の目的を担っていたこと（いまや廃れてしまったとしても）にも注意を促している。自動筆記は、身体的な働きと感情の動きを想起することとを結びつけるのだ。

ハストヴェットは身体図式や行為と感情や記憶の深いつなが

りに関する思索を、精神科学の説明を踏まえつつ、自伝的な記憶を頼りにして展開していく。次から次へと専門用語と個人的な思い出のあいだを行き来するハストヴェットの記述は、目が眩むほどであるが、簡潔な言葉が並び抜かれ、きわめて示唆的かつ魅惑的である。読みやすい日本語も彼女の文体や思考の歩みを的確に捉えている。病態失認の例を通して認知と身体機能の不可分な結びつきを述べたかと思えば、他者と切り離すことのできない自己に関連する鏡像やミラーニューロンの話題へと移る。さらには、顕在記憶が場所に根づいていることを、キケロの記憶術から二〇世紀のロシアの精神分析家アレクサンドル・ルリヤの症例（『偉大な記憶力の物語』一九六八年）まで辿っていく。とりわけ重要なのは、記憶は本質的に、具体的な行為の身体図式を通して、場所に結びついているという考えである。「頭の中にある場所は心にとって実用的なものであり、それがあるおかげで記憶が取り戻しやすくなっている」。ハストヴェットにとつて、小説の方法とは、記憶の正確な再現ではなく再構成にあるので、その記憶の真偽自体はあまり問題にはならない。むしろ書くという行為自体を通して、場所に関する感情的経験が変形を被って表象されるようになる心の過程こそが重要視される。さらに、本書の後半では、多くの芸術家たち（フロベール、ドストエフスキイなど）が、とりわけ扁桃痛やてんかんなどの病いを患っていたことも取り上げられ、創造の

病いと神秘主義といったお馴染みの文学的テーマが、現代的な観点から再考されている。

### 「震えのある女」とは誰か——文学の寓意

ハストヴェットの思索は、転換性の痙攣に謎にまつわる、さまざまな主題へと横滑りしながら進められていくが、結局のところ、当の幽霊の正体はわからずじまいである。その正体を突き止めたとしても、震えのある女の幽霊は再び現れるかもしれないし、そうでなくとも、いつの間にか消え去ってしまったかもしれない。いずれにせよそれは、私は「覚えていて」と書くことで、記憶を語り直そうとすることに伴う、消し去り難い痛みと高揚の感覚と不可分なことだけは確かである。本書は、哲学のホットな話題である心脳問題を、父の喪失とそのメランコリーによって引き起こされた「私」の感情の揺れ動きを通して語ろうとする試みになっている。その語りのスタイルは、アウグスティヌスの告白録やデカルトの哲学の伝統を意識的に踏襲しているともいえるが、こうした自伝的語りによって、必ずしも私が見出されることには帰着しない。むしろ、「震えのある女」は、「私」を絶えず引き裂き混乱させるような未知の力として現れてくる。それに対する抵抗と愛情の相反する感情の記録が本書であるといえよう。ハストヴェットは、「震えのあ

る女」にこう語りかけてみせる。「それにもかかわらず、私はあなたに没頭していると思う瞬間がある。何かを必死で見つめるあまり、自分が消えてしまったように感じる瞬間もある。内なる語り手が休暇をとって、私をしばらく放っておく。さまざまの見知らぬ手や、フラッシュバックや、発作や、幻覚・幻聴という形をとるだけでなく、もつとずつとありふれた出来事として、行動や言葉はひっきりなしにこの語り手を混乱させる」（二〇〇頁）。ハストヴェットにとって「書くこと」は、小説の人物エリックを創作したように、「震えのある女」という分身やオルター・エゴや幽霊を増殖させ、私を見知らぬ他者へと分裂させ、私のあり様を攪乱し混乱させることでもある。しかし同時に、その分裂を馴染みのある親しげなものに変えていく力にもなる。かくして、私のヒステリックな本性を体现する「震えのある女」とは、文学的営みの寓意にはかならないことが理解されるだろう。ハストヴェットが、読書とは「私」が「他人」の言葉の中で生きる行為だと述べる一節には、彼女の文学への信頼が端的に要約されているように思える。読書には自己の喪失や抵抗がともなうが、それは苦痛であるよりも楽しみといえるものである。

こんなふうには他人の心の中に入ることと一番近いのは、読書だ。読書というのは、軟らかい心にせよ硬い心にせよ、さま

ざまな思考様式や、それによって生み出されたさまざまな考えが最も如実に現れる、心の中の舞台だ。ここでは、他人の内なる語り手と接することができる。要するに、読書とは他人の言葉の中で生きるための方法だ。読んでいるあいだは、その人の声が私の語り手になる。もちろん、私は自分自身の批判精神を保持しているから、ちよつと立ち止まって、うん彼の言うとおりにねとか、いいえこのことを完全に見落としているわとか、月並み人物ねとか、ひとりごとを言うことができるけど、ページ上の声に説得力があればあるほど、私は自分の声を失う。私は他人の言葉にそのかされて、自分を放り出してしまふ。そのうえ、私は自分とはまったく違ったものの見方に引き込まれてしまふことがある、その声が自分からかけ離れていたり、無愛想だったり、気難しかったりすればするほど、気がついていたら自分が引き裂かれ、二つの頭で同時に考えるようになっていく。抵抗に打ち克つのは、読書の楽しみの一つだ（一五二頁）。

ハストヴェットにとって読書とは、他者と自己、語り手と読みの声の混乱と分かちがたい。読書の楽しみとは、「二つの頭で同時に考える」ことであり、他人の言葉にそのかれつつも自分の声を失わずに「抵抗に打ち克つ」ことであり、自己放棄と新たな思考方法の出現とが両立する「心の舞台」なのである。



ハストヴェットの闘病記の魅力は何よりも、病原の正体の探求や治療過程の苦しみの表出にあるというよりは、むしろ、悲哀を葛藤の喜びや高揚感へと変容させていく文学的ドラマを堂々と演じきるその心の健かさにある。

### 父の喪の作業

ところで、ハストヴェットの父が晩年に患っていたのは肺気腫であった。父の病気が、肺という「声」に関わる器官の病いであったことは本書の主題にとつてきわめて暗示的に思える。

ハストヴェットは、父の最期のことをこう綴っている。前の晩に彼女は電話の受話器ごしで「愛してる」という言葉を絞り出すことがやつとであった。その後父と一緒にいる夢を見て目が覚めると、その訃報を聞くことになった。彼女は父の言葉を思い起こしながら弔辞を書いて、それを読み上げることができたのだが、その後、父が教えた大学でその言葉を語ろうとするときに震えが現れてきたのである。このように本書が繰り返し立ち返るのは、喪の作業——語ることができなくなった父の声を体内化し、自分の声として聞き、読み、思い出し、語り、書くこと——への妄執である。ハストヴェットは本書の冒頭で、父と交わした最期の会話の内容がどうしても思い出せないが、声と場所の記憶だけははっきりと覚えていと書く。まさに「震

えのある女」による読書への誘いは、その声と場所について覚えていると書くことから始まっている。

父が死んだとき、私はブルックリンの自宅にいたけれど、ほんの数日前まではミネソタ週ノースフィールドにある老人ホームのベッドサイドに付き添っていた。身体は衰弱していたものの、意識ははっきりしていて、一緒に話したり、笑ったりもしたのを覚えている。最後にどんなことを話したのかは思い出せないけれど。それでも、父が最期を過ごした部屋のことは、はっきりと思い出せる……(五頁)

(上田麻由子訳、白水社、二〇一一年刊)

(いしたに はるひろ／芸術学)